



Title	Alderete, John D. (1999) Morphologically Governed Accent in Optimality Theoryの日本語のアクセントの分析の問題点
Author(s)	角道, 正佳
Citation	間谷論集. 2017, 11, p. 1-23
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89838
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究論文〉

Alderete, John D. (1999) *Morphologically
Governed Accent in Optimality Theory*
の日本語のアクセントの分析の問題点*

角道 正佳

1. Alderete の日本語のアクセントの扱い

Alderete の論文⁽¹⁾ の日本語に関する部分を分類すると、まず Root-Controlled Accent (語根統制アクセント) と Affix-Controlled Accent (接辞統制アクセント) に分かれる。前者は Recessive (劣性) であり、後者は Dominant 1 (優性 1) と Dominant 2 (優性 2) に分かれる。Dominant 1 は shift (核牽引)⁽²⁾ と称される。これとは別に Edge effect (末端効果)⁽³⁾ によって語根にアクセントが実現する Pre-accenting (前アクセント) と接辞にアクセントが実現する Post-accenting (後アクセント) に分類される。以上の関係に Alderete には記されていないアクセントの有無 [±核] を付け加え、分類上の名称 A ~ F と例を付け加えると以下のようになる。Alderete には用いられていないが、説明の便宜上、接辞境界の記号として -(劣性型接辞境界)、=(優性 1 型接辞境界)、#(優性 2 型接辞境界) 及びアクセント記号として ˘ (A)、_˘ (C)、_ (D)、˘ (E)、˘˘ (F)⁽⁴⁾ を用いる。B と C に該当する例を Alderete は述べていない。後述するように末端効果は実は不要である。接辞が持っている情報はすべて境界より後ろにあると考えるべきである。したがって前アクセントは本来は -˘ 氏、=_ 屋(や)、#˘ 家(け) と表記すべきである。Alderete は名詞+名詞型の合成語⁽⁵⁾ を上述の分類とは別扱いにしている。したがって複合語のうち合成語を除いた派生語が A、D、E、F に属す。動詞から名詞を派生する接辞は D、F に含まれる。

Alderete による日本語のアクセント分類⁽⁶⁾

		語根統制アクセント		接辞統制アクセント			
		劣性		優性			
				優性 1 (核牽引)		優性 2 (自己主張)	
分類		A[+核]	B[-核]	C[+核]	D[-核]	E[+核]	F[-核]
例	前	-「氏	-た	=「れ」ば	=「屋	#「家	
	後	-た「ら			=手「	#「っば「い	#「っ子「

2. 日本語が扱われている章(ただし A～F の分類及び日本語による表現は角道)

Alderete の論文で日本語が扱われているのは以下の通りである。後述するように※が問題になる部分である。

1. 1. 1 Goals

D/=「屋 /、E/#「家(け) /、F/#「っ子「 / (原論文ではデータ提示のみ)

3. 3 Extended Case Study: Tokyo Japanese pp. 80-109

単独のアクセント

命、心、頭

後部が自立語の合成語

大カマキリ、大和撫子、偽唐傘、寝正月、アイスコーヒー、南アメリカ、マイクロバス、ファーストキス、テムズ川、ミートパイ、クワガタムシ、建設省

接頭辞

新-、真-、小-、大-、素- (原論文にはデータ提示のみ)

5. 2 Dominance Effects as Transderivational Anti-Faithfulness pp. 153-161

(派生間反忠実性としての優性効果)

※ E/#「っば「い / [+自己主張、+核]

※ F/#「っ子「 / [+自己主張、-核]

5. 2. 4 Implications pp. 177-179 「の」(属格の「の」の平板化)

5. 3. 3. 1 Strict Base Mutation in Pre- and Post-accentuation pp. 200-207

(前後アクセントにおける厳密 base⁽⁷⁾ 変異)

合成語の一部

※ Pre-accent(前アクセント) = 後部が 2 モーラ以下

※ Post-accent(後アクセント) = 後部が 3 モーラ以上

5. 4. 1 p. 216 (93) D/= 物 /

5. 4. 3 Case Study: Accent Shift in Tokyo Japanese pp. 227-234

(東京方言のアクセント牽引)

※ D/= 物 /、D/= 屋 / 前アクセント flop (アクセント移動)

※ D/= 手 _、D/= な _ がら / 後アクセント deletion (語幹アクセント消去)

3. Alderete の博士論文の主張、提案

1. Benua の派生間同一性を利用し、新たに派生間制約における派生間反制約を設けた。
2. Cupeño 語、ロシア語、日本語、オランダ語 Limburg 方言、Aguaruna 語の韻律的現象を統一的に捉えようとした。日本語は case study である。

4. 問題点

Alderete の分析には以下の問題がある。

1. 制約 (constraint) が多すぎる。
2. Align の制約の定義が曖昧で候補の評価方法がわからないことがある。
3. 全体の序列 (ranking) が不明である。
4. 不必要な規約がある。
5. 自律分節音韻論 (Autosegmental Theory)、韻律理論 (Metrical Theory) 以来のアクセントを担う単位は母音 (or 音節) であるという前提を踏襲している⁽⁸⁾ため、不自然な議論が展開されている。(※の部分)、末端効果
6. アクセントのバリエーションの存在を無視している。例えば、/ 物 /
7. アクセントの適用される範囲を考慮しないで規則的な部分のみを扱っている。例えば、/ 屋 /
8. 先行研究 (特に McCawley (1968)) の成果が活かされていない。

日本語を扱った部分には以下の制約がある。論文の議論の提示順では複雑になるので、わかりやすくするため順序を変え数字などを付けた。この順序は序列ではない。なお何もついていないのはタブロが示されていない制約である。

- p. 84 (38) ② PROS-FAITH_{Root} (韻律忠実性 (語根))
- p. 84 ③ PROS-FAITH_{Max} (韻律忠実性 (接辞))
- p. 84 ④ ACCENT-TO-HEAD (σ) (アクセントは音節の主要部に)
(特殊拍のアクセント回避)
- p. 230 (118) ¬NO-FLOP-PROM (卓立移動)⁽⁹⁾
- p. 89 (46) b ⑤ HEADEDNESS (PrWd) (主要部性 (韻律語))
- p. 156 (7) b (すべての韻律語は主要部韻脚 (head foot) を持つこと)
- p. 178 (42) (¬OO_{Dom}-MAX-PROM & ANCHOR (MWd, MinP, R))_μ ≡
¬OO_{Dom}-MAX-PROM Fin-μ
(派生間優性卓立消去 (末端音節))
- もし base の卓立 x が関連する出力で卓立 x' と対応する関係にあるならば、そしてもし x' が MWd の最後のモーラに関連しているならば、x を消去せよ。(語幹尾高型を平板化)
- p. 179 (44) ⑥ σ₁ MAX-PROM (単音節語卓立消去禁止)
- p. 233 (126) ⑦ ¬OO_{Dom}-MAX-PROM (派生間卓立消去)
- p. 83 (36) ⑧ NONFINALITY (非最終性)⁽¹⁰⁾
- 韻律語の主要部 (韻脚、音節) は最後にあつてはならない。
- p. 92 (54) ⑨ DE-ACCENT-N₁ (前部要素のアクセント消去)
位置は関係あり⁽¹¹⁾
- p. 94 (59) ⑩ MAX-PROM (卓立消去禁止)
- p. 95 (60) ⑪ NON-FLOP-PROM (卓立移動禁止) 方向は関係なし⁽¹¹⁾
- p. 92 (55) ⑫ ACCENT-TO-HEAD (アクセントは主要部に)
- p. 94 (59) ⑬ DEP-PROM (卓立挿入禁止) 位置は関係あり⁽¹¹⁾
- p. 83 (36) ⑭ ALIGN-R (PROM, PrWd) (整列 - 右)

卓立は韻律語の右側に整列されなければならない。

p. 83 (36) ⑧ ALIGN-L(PROM, PrWd) (整列 - 左)

→ p. 92 (53) 卓立は韻律語の左側に整列されなければならない。

p. 90 (49) ⑨ WORD-BINHead (語 2 元体(主要部))

P. 91 ⑩ ALIGN-R-Head (整列 - 右(主要部))

p. 206 (80) ⑪ CULMIN (最高性)

アクセントは一カ所以上あってはならない。

p. 207 (84) ⑫ \neg OO_{Dom}-DEP-PROM_{Edge}- σ (派生間優性卓立挿入(末端音節))

⑬ IO-MAX-PROM_{Root} (入出力卓立消去禁止(語根))

⑭ \neg OO_{Rec}-DEP-PROM_{Edge}- σ (派生間劣性卓立挿入(末端音節))

⑮ IO-DEP-PROM_{Root} (入出力卓立挿入禁止(語根))

p. 201 (73) \neg OO-DEP-PROM & ANCHOR-R/L (Stem, PrWd) $\sigma \equiv$

⑯ \neg OO-DEP-PROM_{Edge}- σ

(派生間卓立挿入 & アンカー右 / 左(語幹韻語)音節

\equiv 派生間卓立挿入(末端音節))

base- 派生対で、base に存在しない卓立は接辞化(=接辞付加)において派生形で de-align された音節に挿入されなければならない。

p. 230 (118) \neg No-FLOP-PROM (卓立移動)

p. 234 (127) ⑰ \neg OO_{Dom2}-MAX-PROM (派生間優性 2 卓立消去)

⑱ \neg OO_{Dom1}-MAX-PROM (派生間優性 1 卓立消去)

⑲ OO-MAX-PROM (派生間卓立消去禁止)

⑳ \neg OO_{RecE}-MAX-PROM (派生間劣性卓立消去)

p. 230 (120) (a) \neg OO_{Dom}-No-FLOP-PROM (派生間優性卓立移動)

(b) OO-No-FLOP-PROM (派生間卓立移動禁止)

(c) \neg OO_{Rec}-No-FLOP-PROM (派生間劣性卓立移動)

6. 制約の序列

制約の全体の序列は示されていない。

6.1 合成語グループ

名詞 - 名詞合成語の制約序列が p. 95 (60) に示されている。

- ① NON-FINALITY_{Comp} >> ③ MAX-PROM] >>
 ② DE-ACCENT-N₁ >> ④ NON-FLOP-PROM
 ⑤ ACCENT-TO-HEAD (P-Comp) >> ⑥ DEP-PROM >> ALIGN-R (PROM, PrWd) >>
 ⑧ ALIGN-L (PROM, PrWd)

主要部決定の序列 (「大和撫子」, 「ミートパイ」の下線部が主要部であることを示すため)

- ⑨ WORD-BIN_{Head} >> ⑩ ALIGN-R-HEAD

⑨、⑩の制約によって査定された結果が①～⑧の制約によるタブロの入力になるという関係になっている。つまり OT では望ましくない strata が用いられている。

6.2 前アクセントグループ

前アクセント型 (A, C) の序列が p. 207 (84) に示されている。

- ① CULMINATIVITY >> ② \neg OO_{Dom}DEP-PROMEdge- σ >> ③ IO-MAX-PROMRoot, >>
 ④ \neg OO_{Rec}DEP-PROMEdge- σ >> ⑤ IO-DEP-PROMRoot >> ⑥ \neg OO-DEP-PROMEdge- σ
 ②は 優性 2 (自己主張) / \neg 家 /、④は劣性 / \neg 氏 / に関連する制約である。

以上の制約とは別に p. 230 (120) a に以下の序列が示されている。

- (a) \neg OO_{Dom}-No-FLOP-PROM >> (b) OO-No-FLOP-PROM >> (c) \neg OO_{Rec}-No-FLOP-PROM
 >> IO-DEP-PROM

最後の制約は⑥に似ているが同じと考えて良いかどうか曖昧である。

6.3 後アクセントグループ (優性効果)

後アクセント型 (D, F) の制約序列が優性効果として p. 234 (127) に示されている。

本文の記述と違うので、本文に合わせて修正する。

- ① $\neg \text{OO}_{\text{Dom2}}\text{-MAX-PROM}$ >> ③ O-MAX-PROM >> ⑤ $\text{IO-MAX-PROM}_{\text{root}}$ >>
 ② $\neg \text{OO}_{\text{Dom1}}\text{-MAX-PROM}$]
 ④ $\neg \text{OO}_{\text{Rec}}\text{MAX-PROM}$

これとは別に次の序列が示されている。

- ① NonFINALITY >> ⑥ DEP-PROM >> ④ HEADEDNESS (PrWd)

問題点は 6.1 (合成語グループ)、6.2 (前アクセントグループ)、6.3 (後アクセントグループ) の序列が相互にどういう関係になっているのか示されていないことである。しかも、6.2 (前アクセントグループ) と 6.3 (後アクセントグループ) に 2 種類の序列があり、6.3 (後アクセントグループ) に 6.1 (合成語グループ) と 6.2 (前アクセントグループ) の制約が混在していることである。

7. 規約

Alderete は末端効果を実現するために、以下のような規約を設けている。まずデフォルト末端効果の概念について説明する。Cupeño 語の *edge tropism* (末端親和性) と *edge orientation* (末端志向) の例をあげて次のように説明している。末端親和性は基底にアクセントがない場合、左端にアクセントを付与する (挿入する)。例えば /yax+em/ [yáxem] 'say! (2 人称単数形)'。末端志向は基底にアクセントが 2 つある場合、右側のアクセントが残る (他のアクセントを消去する)。例えば、/pé+yax+qál/ [peyaxqál] ('he was saying'。さらにロシア語の例として、語幹にも語尾にもアクセントがない場合、語尾の左端の音節 (= 第一音節) にアクセントを付与する。例えば、/stol+i/ [stolí] 「机 + 複数主格 / 対格」、/stol+am'i/ [stolám'i] 「机 + 複数造格」。Alderete は日本語の名詞 + 名詞合成語で「後部要素が長い場合は、後部要素の左端 (= 第一音節) にアクセントを付与し、後部要素が短い場合は、前部要素の右端 (= 最終音節) にアクセントを付与する」というプロセスを考え、それを実現するために、後部要素の長短を区別する以下のよう

な規約を設けている。

合成語に対する構造の提案 (p. 89(45))⁽¹²⁾

a. P-Comp (韻律合成語)

$\begin{array}{c} / \quad \backslash \\ \dots \quad \text{PrWd}_{\text{Head}} \text{ (韻律語}_{\text{主要部}}\text{)} \\ \text{[南} \quad \quad \text{[アメリカ]]} \\ \text{南} \quad \quad \text{ア]メリカ} \end{array}$

b. P-Comp (韻律合成語)

$\begin{array}{c} / \quad \backslash \\ \text{PrWd}_{\text{Head}} \text{ (韻律語}_{\text{主要部}}\text{)} \quad \dots \\ \text{[[テムズ] \quad \quad 川]} \\ \text{テムズ] \quad \quad 川} \end{array}$

前部要素、後部要素は単独でアクセントをもっていない場合があるのに対し、名詞+名詞合成語は必ずアクセントを持っているので、韻律語と韻律合成語という2つの範疇を認めざるを得なくなっている。上の構造でaは後部要素が主要部になり、bは前部要素が主要部になる。aは主部の左端（第一音節）にアクセントがあり、bは主要部の右端（最終音節）にアクセントがある。主要部を決めるのは長さであり以下のように規定されている。

名詞 - 名詞合成語 (≡ 自立語 + 自立語合成語) の主要部性 (p. 91(50))

- a. 後部要素が長い場合 $[\dots [\mu \mu \mu \dots]_{\text{主要部}}]$
 後部要素が3モーラ以上あれば、後部要素が主要部
- b. 後部要素が短い場合 $[[\dots]_{\text{主要部}} \mu (\mu)]$
 後部要素が2モーラ以下なら、前部要素が主要部

アクセントの配置は以下のように説明されている。

デフォルト反対側としての分裂アクセントデフォルト (p. 92(52))

- a. 後部要素が短い場合の右端（最終音節）アクセント

↓

$[[\underline{\sigma} \dots \sigma] + \mu (\mu)]$

b. 後部要素が長い場合の左端（第一音節）アクセント



[...] + [σ ... <σ>]

後部要素が2モーラ以下なら、前部要素が主要部であり、主要部の右端にアクセントが来るという記述には簡単に例外が見つかる。マイクロ+バスは後部要素が2モーラであるのに、マイクロ「バス」ではなく、マイクロバ「ス」となるので、前述の説明に合わない。これについて Alderete は p.94 (59) のタブロで説明している。

/マイクロ+バ「ス」/	③ MAX-PROM	⑤ ACCENT-TO-HEAD	⑥ DEP-PROM
a. マイクロ -バ「クス」		*!	
b. マイクロ「バ」クス	*!		*

一方「クワガタ「ムシ」」は p. 94 (58) のタブロで次のように示されている。入力 of /くわが「た+むし」/ のアクセントが間違っているが、このまま引用する。PROS-FAITH は③ MAX-PROM と⑥ DEP-PROM をまとめて表現した制約であろう。(59) のタブロに合わせるために①の NON-FINALITY に関する情報 (< >) を候補に書き加えた。? は* が付くはずであるが、示されていない。

/くわが「た+むし」/	② DE-ACCENT-N1	③、⑥ PROS-FAITH	⑦ ALIGN-R	⑧ ALIGN-L
a. くわが「た-むくし」	*		?	?
b. く「わがた-むくし」		*	*!	
c. くわがた 「-むくし」		*		*

Alderete の論文には、以上のように関係する制約が断片的にしか取り上げられていない。両者に関係すると思われる①～⑧のすべての制約を付け加えてタブロを書いてみると次のようになる。「ミート「パイ」」のタブロでこの制約を用いて評価したものは示されていないので付け加えた。また候補も付け加えた。この3

語に関する限り正しい候補が選ばれる。しかし後部要素が2モーラで平板式の「外科」をもつ合成語「整形外」科は[せいけい「げ」](さらに正しくはこれはより上位にある©HEADEDNESS(PrWd)によって特殊拍を回避した[せいけ「いげ」か、])を間違って最適な候補として選んでしまう。なお候補の下線は主要部を表す。制約の名称が長いので数字だけを示す。

/マイクロ+バ「ス」/	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
a. <u>マイクロ</u> -バ「ス」					*!			
b. <u>マイクロ</u> 「」-バ「ス」			*!			*		
/くわが「た+むし」/	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
a. <u>くわが</u> 「た-むし」		*					?	?
b. く「わがた-むし」			*		*		*!	
c. <u>くわがた</u> 「」-むし			*		*			*
d. <u>くわがた</u> -む「し」			*		*	*!		
/ミート+パ「イ」/	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
a. <u>ミート</u> -<パイ>		*!					*	
b. <u>ミート</u> -<パ「イ」>	*!		*		*		*	
c. <u>ミート</u> 「」-<パイ>			*			*		*
/せいけい+げ「か」/	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
a. <u>せいけい</u> -げ「か」					*		*	*
b. <u>せいけい</u> 「」-げ「か」						*		*
c. 正 <u>せいけい</u> -げ「か」					*			

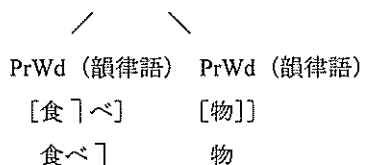
このことは主要部を決定し、末端効果によってアクセントの位置を示そうとしたことに問題がある。後部要素が語彙的に持っているアクセント情報が全体のアクセントを決めていると考えなければ説明できない。つまり、合成語の後部要素としての形式は/#「むし」/、/#バ「ス」/、/#げ「か」/でなければならない。すべて優性2（自己主張）である。単独の形式は/むし「」/、/バ「ス」/、/げ「か」/であって、合成語の後部要素となる場合とは別のアクセントを持っている⁽¹³⁾。

Alderete は p.160(16)で「仇っばい」の入力を/あだ「+っぱ「い」/としている。これは「っぱ「い」が優性2（自己主張）の後アクセントであると考えているこ

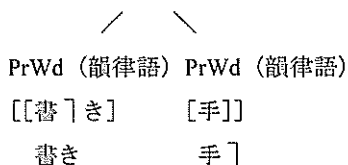
となる。しかし東京アクセントの保守的な発音では「仇」っぽかった、「仇っぽ」いとなるので、「っぽ」いのアクセントは「い」が優性1（核牽引）のためにその位置にアクセントが来ているにすぎない。したがって「っぽい」のアクセントは後アクセントではなく、前アクセントである。もっとも前アクセントか後アクセントかを考慮する必要は本来存在しない。さらに付け加えると、「仇っぽかる」うのアクセントの位置は意向形⁽¹⁴⁾/(y)oo/が決めている。意向形は優性2（自己主張）の型であり、「仇」、「っぽ」が持っているアクセントは消去され意向形のアクセントが最終的に現れる。Alderete はこういった循環的な関係については一切論じていない。

「食べ物」、「書き手」の場合は、以上の構造とは違った以下のような構造を提案している。これらは優性1（格牽引）のタイプであり、前部要素にアクセントがあれば移動し、アクセントがなければそのまま（＝平板式）になる。全体が必ずしもアクセントを持っていないので、上の node は韻律合成語ではなく韻律語である。

p. 229 (117) PrWd (韻律語)



PrWd (韻律語)



Alderete の説明 (p. 234) によると、「物」は前アクセントであり、語幹アクセントは移動(flop)する（/食 っべ+物/[食べ っ物]）のに対して、「手」は後アクセントであり、語幹アクセントは消去(deletion)される（/書 っき+手 っ/[書き手 っ]）ことになる。しかし、この分析は正しくない。どちらも牽引でよい。つまり「物」は 物、 「手」は 手 の下線の位置までアクセントが牽引されると考えればすむことである。前アクセント、後アクセントのような分類をするからかえって複雑な議論が必要になってしまうのである。

8. 制約のグループ間の関係

8.1 前アクセント

前アクセントに関しては合成語「クワガタムシ」を「西村家」、「吉田家」のタブロに現れる優性型2の前アクセントの制約と序列(①>>②>>③>>⑤)で評価しても、正しい結果が得られるし、その逆、つまり優性型2の前アクセントの語を合成語の前アクセントの制約と序列で評価しても正しい結果が得られる。

8.2 後アクセント

後アクセントに関しては合成語「大和撫子」、「南アメリカ」を「仇っばい」のタブロに現れる優性型2の後アクセントの制約と序列(②>>③>>④)で評価すると正しくない形が選ばれ、その逆、つまり優性型2の後を合成語の後アクセントの後に現れる制約と序列(①>>⑤>>⑥>>⑦>>⑧)で評価しても正しくない形が選ばれてしまう。優性型2の後アクセントであると考えられる「裁判所」、「警察署」を②>>③>>④で評価しても正しくない形が選ばれる。少なくとも⑥の制約が必要である。

合成語は本来優性2型であると考えられるが、制約には互換性がない。

「建設省」	を	E 前	/ # 家 /	として分析すると	制約十分
「南アメリカ」	を	E 後	/ # っばい /	として分析すると	制約不足

8.3 全体の序列の可能性

以上の事実から全体の序列の可能性を6.3(後アクセントグループ)>>6.2(前アクセントグループ)>>6.1(合成語グループ)と仮定してみることができるかもしれない。しかし、p.234(127)の序列を見ると④が①と③の間に割り込んでいる。

9. その他の問題点

9.1 アクセントのバリエーション

アクセントの例外やバリエーションについての考察がない。したがって最適性理論でどう取り扱われるのかは不明である。

p. 216(95)にアクセント移動(shift)の例として McCawley(1968), Poser(1984)からの引用として「-物」の例が挙げられている。

- a. か] き = _ もの → かき] もの (書き物)
- よ] み = _ もの → よみ] もの (読み物)
- b. のり = _ もの → のりもの^〳 (乗り物)
- わすれ = _ もの → わすれもの^〳 (忘れ物)

しかし起伏式語幹には例外が多い。

- え] = _ もの → *え] もの 正しくは えもの] (獲物)
- た] べ = _ もの → たべ] もの ~ たべも] の (食べ物)

また Alderete には名詞語幹の例がないが、以下の語がある。

- たから] = _ もの → *たから] もの 正しくは たからもの^〳 (宝物)

p. 228(116)の Poser(1984: 50)からの引用の「-手」にも同様の問題がある。

- a. か] き = て _ → かきて] (書き手)
- よ] み = て _ → よみて] (読み手)
- b. かたり = て _ → かたりて^〳 (語り手)
- きき = て _ → ききて^〳 (聞き手)

は問題がないけれども、起伏式動詞語幹は必ずしも a のようにならない。

はな ㄱ し = て _ → はなして ㄱ ~ はなして ㄱ (話し手)
 うけ ㄱ = て _ → *うけて ㄱ 正しくは うけて ㄱ (受け手)

さらに「-所」、「-署」、「-書」などの尾高型～平板型の自由交替および前部要素のアクセントの位置の違いによる異形態（アメリカ ㄱ 人、日本じ ㄱ ん）⁽¹⁶⁾について一切論じられていない。

9.2 アクセント規則の適用範囲

p. 228(114)にアクセント移動(shift)の「= _ 屋」の例が挙げられている。前部要素が2モーラの場合は一部の例外（お茶 ㄱ、お茶屋 ㄱ (料亭)、ただしお茶 ㄱ 屋 (茶商)、や ㄱ ど、宿屋 ㄱ）を除くと、起伏式語幹の場合は「屋」の前にアクセントが移動し、平板式語幹の場合は全体が平板式になるので正しいけれども、前部要素が4モーラ平板式のチンドン屋 ㄱ、運送屋 ㄱを同じように扱うのは正しくない。というのは前部要素が3モーラ以上の場合は平板式であろうと起伏式であろうと「...屋」のアクセントはすべて平板式になるからである。詳細は角道(2010)を参照されたい。

9.3 その他

p. 3(3)にアクセントがある語幹にはアクセントを挿入しないという Blocking effect (阻止効果)について述べられている。これは前アクセントに限られる現象であるが、前アクセントと後アクセントを分ける必要がなければ無意味な効果である。例えば「-ㄱ たち」は固有のアクセントを持っていて、起伏式の前部要素に接続する場合そのアクセントが消去されと考えればすむ。

ㄱ ㄱ く -ㄱ たち /	/ きみ -ㄱ たち /	
ㄱ ㄱ く たち	—	劣性型接辞アクセント消去
ㄱ ㄱ く たち]	[きみ ㄱ たち]	

p. 3 に完全な間違い（あるいは勘違い）がある。Cupeño の pre-accentuation（前アクセント）は RCA（語根統制アクセント）、日本語の pre-accentuation（前アクセント）は ACA（接辞統制アクセント）と述べられているが、日本語の前アクセントには語根統制アクセントの「-」氏、-「たち」と接辞統制アクセントの「#」家の 2 種類がある。

10. 再分析

標準理論の書き換え規則と派生に基づいて記述すると以下ようになる。必要な情報は語幹の核の有無、接辞のアクセントの種類（劣性（ ϕ ）、自己主張（ \uparrow または \downarrow ）、核牽引（ $_$ ））であり、必要なアクセント規則は(1)～(5)及び(6)～(8)である。1 は語幹が起伏式、2 は語幹が平板式の場合を表す。Alderete が扱っていない C の場合を付け加える。

	語幹	接辞		語幹	接辞	規則
1A	\uparrow	- \uparrow	→	\uparrow	-	(5), (8)
例	/にし \uparrow むら- \uparrow し/			にし \uparrow むらし(西村氏)		
1B	\uparrow	-	→	\uparrow	-	(8)
例	/た \uparrow べ-た/			た \uparrow べた(食べた)		
1C	\uparrow	# $_$	→	# \uparrow		(3), (5), (8)
例	/た \uparrow べ# $_$ れ \uparrow ば/			たべ \uparrow れば(食べれば)		
1D	\uparrow	= $_$	→	= \uparrow		(3), (7), (8)
例	/た \uparrow べ=な $_$ がら/			たべな \uparrow がら(食べながら)		
1E	\uparrow	# \uparrow	→	# \uparrow		(4), (6), (8)
例	/にし \uparrow むら# \uparrow け/			にしむら \uparrow け(西村家)		
1F	\uparrow	# 「	→	#		(4), (7), (8)
例	/こ \uparrow うべ# \uparrow っこ「/			こうべっこ(神戸っ子)		
2A		- \uparrow	→	- \uparrow		(8)
例	/よしだ- \uparrow し/			よしだ \uparrow し(吉田氏)		
2B		-	=	-		(8)

例	/あけ-た/		あけた(開けた)	
2C	=	_]	→	= (8)
例	/あけ= れ]ば/		あけれ]ば(開ければ)	
2D	=	_	→	= (8)
例	/あけ-な ながら/		あけながら(開けながら)	
2E	#	1	→	# 1 (6), (8)
例	/よしだ#1け/		よしだ]け(吉田家)	
2F	#	「	→	# (7), (8)
例	/えど#っこ「/		えどっこ(江戸っ子)	

アクセント規則

派生語の後部要素及び合成語の後部要素のうち中高のものは自己主張型アクセントを持っている。合成語のアクセントを記述するためには次の規則が必要である。

- (1) $\phi \rightarrow] / \& \langle C \rangle V_CVCVCV\dots (]) \#$

後部要素が長く尾高型、平板型の場合は後部要素の第一モーラにアクセントを付与する。

- (2) $] \rightarrow \phi / \&\dots_ \#$

後部要素が尾高のアクセントを消去する。

その他の規則は以下の通りである。

- (3) $] = _ \rightarrow \phi =]$

核牽引型のアクセントを指定する位置に移動する。

- (4) $] \rightarrow \phi / _ \{1, []\}$

自己主張型アクセントの前のアクセントを消去する。

- (5) $] \rightarrow \phi /] _$

アクセントが2つある場合は2つめのアクセントを消去する。

最終的に「」だけを残すためには以下の規則が必要である。

$$(6) \text{「} \rightarrow \text{」}$$

$$(7) \text{「} \rightarrow \phi$$

$$(8) \{-, \#, =, _ \} \rightarrow \phi$$

前アクセントと後アクセントの区別は不要であり、P-Comp（韻律合成語）と PrWd（韻律語）の区別も不要である。しかも非常に多数の制約に比べ少数の規則があれば記述できる⁽¹⁶⁾。

注

* 本研究は、科研費 26370449 の助成を受けたものです。

- (1) Alderete (1999) を読むきっかけとなったのは、Wolf (2008) を読んでいた際、pp. 433-434 に *subtractive morphology* (引き算型形態論) は自分の理論では説明できないとして、Alderete を引用し、「神戸っ子」、「江戸っ子」の例を挙げていたことである。「っ子」は前部要素のアクセントを消し、全体を平板型に変える働きを持っている接辞であり、同様の接辞は NHK 放送文化研究所編 (2000: 付録 30-63) に 60 の例が記されており決して少数ではない。後部要素が短い場合の複合語のアクセントの多くは後ろから 3 モーラ目（特殊拍の場合はその直前のモーラ）にあるという主張を 1985 年に大阪大学で開催された国語学会で山口光がしており、Kubozono (1993: 17) も同じ主張をしているが、この型になるのは 95 例である。Alderete は引き算型形態論を *Anti-Faithfulness constraint* (反忠実性制約) を設けることによって説明している。
- (2) *shift* と *flop* を区別するために *shift* を核牽引、*flop* を移動と訳した。
- (3) 末端効果は後部要素に関してはかなりの程度説得力があるように思われる。つまり後部要素にアクセントがある場合は、-○「」... の場合はあっても、-○○「」の場合は見当たらないからである。これは偶然なのか、類型的に妥当なのかはわからない。日本語の諸方言の実態を観察する必要がある。しかし前部要素の最終音節にアクセントがある場合を、前部要素のアクセントと見なすのは妥当ではない。アクセントは音節

境界にあると考えることもでき、その場合は形態素境界上（あるいは形態素境界直後）にあるという解釈が可能である。

- (4) 「は平板化を起こす記号として用いる。単独の平板式の語を表す必要があるときは[〃]を用いる。
- (5) Alderete がこの項目で扱っているのは後部要素が単独で用いられる語であるため、合成語と呼ぶことにする。後部要素が単独で用いられない語「神戸っ子」、「吉田家」、「屑屋」、「食べ物」、「書き手」等は派生語と呼ぶことにする。「新書」、「新月」などは癒合名詞（前・後部とも二拍以下の語、金田一春彦監修、秋永一枝編(1982)の付録 p. 10）であって複合語とは考えない。
- (6) 優性1の核牽引は McCawley の attraction を訳したものである。同じ概念を角道(2010)では上野(1994)にならって核保存と表現した。核保存は式保存とは別の概念である。田中(1988, 1992, 1993, 2000, 2005)では声調式と名付けている。田中は京都アクセントに認めている共下（ともさげ）式を東京アクセントには認めていないが、/あかーく-]〇て/[あか]くて]（赤くて）の「て」は共下式である。名称及び記号あるいは対応する規則の大まかな対照表を以下に示す。

Alderete (1999)	Recessive (劣性)	Dominant 1 (優性1)	Dominant 2 (優性2)	Pre-accenting (前アクセント)	
Kobayashi (1975)	General Dominance rule	Shift rules	Posterior-Dominance rule		
Kubo (1993)	Recessive	Dependent	Dominant		
田中 (1988)	従接式 =	独立式 #	声調式 →:	支配式 X]	下接式]
田代 (1999)	そのまま型		わがまま型	ひざまづき型	
角道	順接 -	核牽引 核保存 =	自己主張 #]	低接 -]	-]〇

- (7) base は root (語根) や stem (語幹) とほぼ等しいと p. 1 に述べられているが、定義はあいまいである。語基と訳すわけにはいかない。派生間忠実性の他の論文では、ある派生段階の直前の段階を base と呼んでいるように見えるものがある。例えば Benua

- (1995, 1997), Harada (1999)。
- (8) アクセントを担う単位が音節（あるいはモーラ）であるという立場で日本語を分析しているものには、Haraguchi (1977), Higurashi (1983), 立石 (1984), Kubo (1993) 等がある。この立場における問題の一端については角道 (1996) を参照のこと。
- (9) Alderete は Prominance (卓立) と Accent (アクセント) を区別している。→No-Flop-Prom を直訳すると、「卓立移動禁止反対」となるけれども、禁止反対を取り去って「卓立移動」と意識する。
- (10) Nonfinality は合成語のアクセントの記述において非常に有効に機能しているように見える。後部要素が長い場合、平板型と尾高型をひとまとめにできるという効果がある。また「ミート」[_クパイ]と「マイクロバ」[_クス]のアクセントの違いを最終音節を韻律外にすることで説明できる。しかし「スナック」[_クバ]は説明できない。
- (11) 制約に精密に記述されていないが、タプロを見て解釈するとそうなる。
- (12) Alderete (年号不明) によると 2001 の未見の著書では表記 (or 態度) を変えているようである。
- (13) これは Okuda (1971) の Chapter V の立場と同じである。単独のアクセントと派生語のアクセントが異なることは他にもある。「お-...」のアクセントは...の単独のアクセントが頭高型の場合は保存される（おは[_リし、おげ[_ン気、おい[_ノち、お理[_解]）が、それ以外の場合は、「お-○[_リ...」（お風[_呂、お寿[_司]、おで[_ンわ、お手[_紙]）または「お-...」（平板式）（お祭り、お友達、お心）のどちらかになるため、単独のアクセントと「お-」が付いたときのアクセントを共に語彙的に記述しておかなければならない。「お-」のデータは Higurashi (1983: 41-58) に基づく。
- (14) 「意向形」は形容詞の活用形の名称としては相応しくないが、他に適切な表現が見当たらないので、動詞の場合と同じ名称を用いる。
- (15) 前部要素の最終音節が特殊拍を持っている語で最終音節にアクセントがある場合は「...-じ[_ン]」になり、それ以外の場合は「...[_ン]じん」（特殊拍があれば「...[_ン]特殊拍じん」となる。前者に該当するのは、日本じ[_ン]、台湾じ[_ン]、朝鮮じ[_ン]、等であり、後者に該当するのはアメリカ[_ン]人、中国[_ン]人、ハンガリ[_ン]人、等である。ベルギ[_ン]人は前者の条件に該当するが、実際の発音は不明である。
- (16) 査読者 1 名より「制約が多すぎる」という問題点に関して、原論文が日本語以外の言

語についても分析対象にしているのである以上、数の比較をするなら、原論文が扱う多言語に対しても「規則」による分析を示し、比較しなければ意味がないという指摘があった。多言語に関する規則による分析は論文の制限ページ数を超えるので差し控えるが、他の言語で用いられている制約数 (Cupeno 語 6、ロシア語 7、オランダ語 Limburg 方言 7、Aguaruna 語 7) と比べると日本語に用いられている制約数は異常に多い。これは末端効果に基づいて議論をしたためである。ただしオランダ語 Limburg 方言と Aguaruna 語は末端効果とは無関係である。査読者はさらに、そもそも OT の枠組み自体が「文法はランク付けされた、違反可能な制約群からなり、その制約はユニバーサルであり、標準理論の書き換え規則では 1 つで書ける現象を OT の枠組みでは複数の制約によって最適な候補を選び出すことによって示すものである以上、制約の数の比較は問題にならない」と述べている。制約がユニバーサルであるというのは OT の希望 (or 理念) ではあるが、現実はそうっていない。Alderete の論文ではユニバーサルでない制約が用いられており、OT が避ける派生と *strate* を利用している。同じ現象を記述 (説明ではない) するのにかかるコストは少ないほうが良い。したがって制約数は大きな問題になる。

参考文献

- Alderete, John D. (1999) *Morphologically Governed Accent in Optimality Theory*, Ph. D. dissertation, University of Massachusetts Amherst.
- Alderete, John D. (2001) *Morphologically Governed Accent in Optimality Theory*, New York: Routledge.
- Alderete, John D. (年号不明) 'Updating the analysis of Japanese Compound accent, In Short 'schrift for Alan Prince, compiled by Eric Balcovic.
<http://princwshortschrift.wordpress.com/squibs/alderete/>
- Benua, Laura (1995) 'Identity Effects in Morphological Truncation,' The Derivational Residue in Phonology, Tirbung University, October 5-7, 1995.
- Benua, Laura (1997) *Transderivational Identity; Phonological Relations between Words*, Ph. D. dissertation, University of Massachusetts Amherst.

- Haraguchi, Shôsuke (原口 庄 輔)(1977) *The Tone Patterns of Japanese: An Autosegmental Theory of Tonology* (日本語の音調パターン ―オートセグメンタル・セオリーの研究), Kaitakusha (開拓社), Tokyo.
- Higurashi, Yoshiko (日暮嘉子)(1983) *The Accent of Extended Word Structure in Tokyo Standard Japanese* (標準日本語 ―拡大語構造のアクセント), EDUCA Inc.
- Harada, Ryuji (原田龍二)(1999) 'Syllabification in Khalkha Mongolian and output-output correspondence,' *Phonology at Santa Cruz*, Vol. 6.
- 角道正佳(1996) 「日本語のアクセントは韻律理論で記述可能か ―久保論文の問題点―」『視聴覚外国語教育研究』(大阪外国語大学) 第 19 号, pp. 89-102.
- 角道正佳(2010) 「「..... 屋」のアクセント」岸本秀樹編『ことばの対照』くろしお出版 pp. 27-37.
- 金田一春彦監修、秋永一枝編(1982) 『明解日本語アクセント辞典』第 2 版 三省堂.
- Kobayashi, Chieko (1975) *Japanese Dialects: Phonology and Reconstruction of the Proto-Accentual System*, Ph. D. dissertation, Cornell University.
- Kubo, Miori (久保美織)(1993) 'Domain and Principles of Japanese Word Accent、(日本語のアクセント ―形態素結合に伴う変移の領域と原理)' 『言語文化部紀要』(北海道大学) 24, pp. 131-179.
- Kubozono, Haruo (窪 蘭 晴 夫)(1993) *The Organization of Japanese Prosody*, Kuroshio Publishers (くろしお出版).
- McCawley, James D. (1968) *The Phonological Component of a Grammar of Japanese*, The Hague: Mouton.
- NHK 放送文化研究所編(2000) 『NHK 日本語発音アクセント辞典』日本放送出版協会.
- Okuda, Kunio (奥田邦男)(1971) *Accentual Systems in the Japanese Dialects, A Generative Approach*, (日本語方言アクセントの生成音韻論的研究) Bunka Hyoron Publishing Co. Ltd (文化評論出版株式会社).
- Poser, William (1984) *The Phonetics and Phonology of Tone and Intonation in Japanese*, Ph. D. dissertation, MIT.
- 田中宣広(1988) 「付属語のアクセント解釈について」『昭和 63 年度日本音声学全国大会 研究発表論集』pp. 119-127.

- 田中宣廣(1992) 「付属語のアクセント解釈の方法」『大正大学 国語国文』第二十八号, pp. 1-10.
- 田中宣廣(1993) 「アクセント論と付属語のアクセント解釈」『都大論究』第 30 号, pp. 1-15.
- 田中宣廣(2000) 「付属語アクセントの実態資料から見た日本語アクセント構造に関する試論」『日本音声学全国大会予稿集』 pp. 147-152.
- 田中宣廣(2005) 『付属語アクセントからみた日本語アクセントの構造』おうふう.
- 田代晃二(1999) 『美しい日本語の発音 ―アクセントと表現―』創元社
- 立石浩一(1984) 「日本語東京方言複合名詞のアクセント」第 83 回日本言語学会大会 (於 : 東北大学) ハンドアウト.
- 上野善道(1994) 「青森方言の複合名詞のアクセント規則(2) ―後部要素が 1 拍の場合―」『北海道方言研究会 20 周年記念論文集 ことばの世界』(北海道方言研究草書) 第 5 集) 北海道方言研究会 pp. 184-204.
- Wolf, Mathew Adam (2008) *Optimal Interleaving: Serial Phonology-Morphology Interaction in Constraint-based Theory*, Ph. D. dissertation, University of Massachusetts Amherst.

〈キーワード〉 日本語のアクセント、最適性理論、分析法

**Problems on the Analysis of Tokyo Japanese Accent in
Morphologically Governed Accent in Optimality Theory
by John D. Adlerete**

KAKUDO Masayoshi

Alderete offered an analysis of Tokyo Japanese accent based on Optimality Theory with new anti-faithfulness constraints. He classified Japanese accent into Root-conditioned Accent and Affix-conditioned Accent. The former type accent is recessive and the latter type accent is divided into dominant 1 (shift type) and dominant 2. He also classified accent into two types; Pre-accenting and Post-accenting depending on the notion of Edge effect, which he claims to be universal. This is based on the assumption that accent bearing unit is a syllable. The analysis requires tremendous amount of constraints, the whole ranking of which is not clearly mentioned, although partial ranking is given separately. It is often the case that the definition of the constraint is ambiguous and hard to assess correctly. The category of Prosodic Compound become necessary besides Prosodic Word due to the division of Pre- and Post-accenting. As far as the data he showed is concerned, the analysis seems to be successful, but accentual variation is completely ignored and analysis covers only limited domain of the accent. Rule-based analysis with only several rules is much simpler and requires no special assumptions.